

Series

聞

シリーズ：聞く

く

Vol.4

兵庫県知事
井戸 敏三 さん

HSKS では、北播磨での市民活動にご理解いただき、支援されている方、あるいは活動されている方々に対し、シリーズ「聞く」と題してインタビューを行っています。

第4回目は、平成17年11月20日に兵庫県知事にお伺い致しました。

■質問 <北播磨の魅力>とはどんなところだと思いますか？

●井戸知事 北播磨の魅力を一言で言うのはなかなか難しいですね。それぞれ地域の特色があって西脇・三木・小野・加西・加東・多可それぞれがまとまってない。バラバラなんです。でも、かえってそれがいい。金太郎飴ではない良さがある。私は非常に高く評価をしています。「ニューひょうご」にも書かせてもらったのが北はりま田園空間博物館です。「地域の活動をそのまま見てください。」「良さをそのまま感じてください。」「私たちの生きざまを見てください。」そういう呼びかけです。北播磨はそれぞれがバラバラだからいい。変に統一しない方がいい。だからビジョンも「ハートランド」なのです。何でも自由自在に活動が展開できる。私はそういう舞台が北播磨だと思います。

もう一つは北播磨には伝統文化がたくさんある。他の地域にはない伝統文化、例えば多可町中区の歌舞伎がそうですし、嵐獅山さんや中村和歌若さんが活躍している。さらに、田舎芝居の簞荷（加美区）もある。他ではなかなか残っていないのですが、北播磨には絶えてもまた復活してくる、そういう自然の強さみたいなところがある。杉原紙も同じで一度絶えた技法を復元してきた。西脇の播州織も危機だ危機だと言いつつ常に頑張っている。小野のそろばんも鳴子に使えるし、三木の金物の素材は釣り針に活きたり、輸出もかなり多い。というように、各地域が個性を持っているというのも特色です。それに歴史文化にも個性がある。同じような歴史文化じゃなくて、個性を持った歴史文化が脈々と続いている。

三つ目は、そういうところに住んでいる人がユニークであるということ。それがまた魅力。例えば、北播磨のビジョン会議の活動では寸劇が始まっているんですよ。寸劇は他の地域ではあまりないが、北播磨はこれが多い。きっとジツとしていられない性分の方が多いのでしょうか。そういう地域と歴史文化と人がつくっている。そういうところが魅力じゃないでしょうか。JR加古川線で横尾忠則さんにラッピング列車のデザインをしてもらいましたが、横尾さんらしいデザインに仕上がりました。12月には「銀河の旅」という新しいデザインの列車もお目見えしました。北播磨はこういう夢をつくりだそうとしている地域ではないかと思っています。北播磨ではこの5年間で入込客数が5割増えています。従来の年間800万人ちょっとが1200万人になっている。そういう意味でも北播磨の魅力はどんどん増えている。皆さんの活動と一緒に参加したいと思っている人が増えているからではないでしょうか。



■質問 <参画と協働における県と活動団体の連携>について今後のお考えをお聞かせください。

●井戸知事 「地域ビジョン推進プログラム」の見直しを去年から始めています。期限が来たというよりはこういう計画やプランというのは一定期間で見直しの方がいい。見直す期間としては、だいたい3年から5年が良いのです。次の段階ではどうしようかみんなで考えていただくという意味で、ちょうど見直しを始めたところです。県民主役で、県民の皆さんがやれることを自主的に取り組んでいただいて、それを一緒に進めていく。そのことが参画と協働なんです。例えば、「みんなの夢会議」の運営もそうですし、アダプトシステムというような河川の管理や美化、道路の花を植えて管理していただくこと、これらはかなりできてきました。

しかし県民のグループ同士のタイアップ、北播磨と例えば東播磨、但馬、丹波、というような県民のグループ同士のパートナーシップがもっとあっていいのではないかと思います。そう意味では「シューベルティア一徳おの」には大変期待しています。これは地域を越えたパートナーシップの例です。もう一つ良い例があります。竹炭銀行をやっている加古川市のグループは加美区の人たちと連携している。なぜかという炭の材料は木や竹です。山の管理を良くしないと、下流部・中流部の自分たちの地域の環境や安全も確保できません。そこで地域間同士の「上下流が連携しよう活動」が展開されています。これからはそういう広がりをもっと持っていただければ、もっともっと深みが出てくるんじゃないかと思っています。

その際、行政には常に注文をしていく。「何かやりましょう！」とか「こういうことできないの？」とか、市民活動の目からみて行政

としてこういう取り組みをした方がいいのではないかと、と常に問いかけていただくことが大事だと私は思っています。そのとき県の立場、市町の立場でどこまでやるのか、という仕分けの基準はなかなか明確ではありません。しかし、私は県議会で聞かれたときは、広域的なものとか先導的なものとかモデル的なものを中心に検討していく努力をしていきますと言っています。やれることをやってみようということでおのずと整理がついていくのではないかとと思っています。

■質問 <NPO（民間）に期待するもの>とは何ですか？

●井戸知事 公的施設を民間で管理・運営していただくだけではなく、行政全般にもっと民間の皆さんの発想とか柔軟性とか知恵をお借りしていいのではないかと思います。だから公民協働、つまりともに働くコラボレーションをテーマとして進めていきたい。施設の管理運営は、指定管理者制度という、民間の皆さんに管理をしていただく仕掛けができましたので、これを活用していこうと考えています。県の施設を洗い直して、県営住宅と県立公園に対して18年度から指定管理者制度を導入し、その管理者を募集をしていこうじゃないかと進めています。

これを手始めに、県民の皆さんにいろんな施設をもっと活用してもらうことを考えています。公立の建物は6時や7時で閉めてしまう所が多いのですが、もっと遅い時間帯でも自主管理ができるなら貸しますよということで利用してもらう仕掛けをつくってもいいのではないのでしょうか。学校のナイター施設や体育館、グラウンドを貸したり、給食施設や家庭科教室を貸すといった学校開放をやっているところもありますけど、こういう試みはもっともっとやっていけるのではないのでしょうか。もっと発想を広げていけば病院の運営とか、あるいは学校だってやれるかもしれない。よく公設民営といわれますが、公設民営という発想はきつと民間の方々の知恵や柔軟性、目的追求をするための役人の発想を超えた活動、そんなことに期待が寄せられているのではないかと。これからも公民協働事業をもっと推進していきたいと思っています。

蓮菜市長さんは「うるおい交流館の管理運営は絶対に役人ではしないんだ」と前から言われていました。きっと皆さんの運営が非常にいいからでしょう。やっぱり、NPOや利用している方が中心になって管理運営をすると、利用者の立場に立てるんですよね。管理とか運営をするというのではなくて、どう利用してもらうか、利用者の立場にどう立てるか、そこの差だと思います。頑張ってください。



■質問 <中間支援組織の重要性>とは何だと思いますか？

●井戸知事 10年前の阪神・淡路大震災のときのボランティアの状況を思い浮かべてください。ボランティアをしたいという熱意はあってやって来たんだけど、「どこに泊まったらいいのでしょうか」とか、「私の食事はどこでいただけるのでしょうか」とかそういう人がたくさんいた。そういうボランティアの方々をきちっと組織化して、戦力として現場、現場に投入しなければならない。そういうシステムをどうつくれるか、それが本当にボランティアが生きるか生きないかのポイントになります。昨年の台風23号の時もボランティアの皆さんにいろいろお手伝いいただいたのですが、ボランティアの受け入れが非常にうまくいったところは、コーディネートがきちっとできたところです。コーディネートがきちっとできなかったところは、立ち上がりやすいぶん混乱しました。そう意味からするとボランティアの皆さんをコーディネートするという役割は、役所よりもボランティアをボランティアする方々の機能に期待したいと思っています。

もう一つは、ボランティア活動をどう支援していくかという支援の方法論に関わるのですが、震災を経験してから10年たって、ボランティアの団体をいろいろな形で支援していこうというボランティア団体が増えてきています。ボランティアをする人は何も行政の延長としてやっているわけではありません。だからこそ、どのボランティア団体のどのボランティア活動を支援対象とすべきか、あるいは支援対象とすべきでないかという評価や判断は、やはりボランティアの皆さんに決めてもらった方がいい。震災からの復旧・復興の過程でいろいろな補助事業をしたときに、まず提案をもらって、ボランティアの代表の皆さんに選考委員になってもらって、そこで決めてもらって事業を実施していったという経験があります。ボランティアの皆さんを評価するのは、行政よりボランティアの仲間が評価した方がよほど正しい。そういう意味でボランティアの支援組織というものが必要です。そういう機能を果たすのも中間支援組織としてのボランティア団体の役割として考えられるのではないかと思います。

それから調査研究機能についても、ボランティア団体でなければやりにくい。そこで県のボランティアプラザをつくり、県社会福祉協議会に委託しました。社会福祉協議会にはもともと地域福祉部があってボランティアのコーディネートをやっていたので、そこに預けました。それと合わせて所長は小森先生をお願いしたのですが、つまり役人はトップにいかない。下支えをする。そういう役割に徹しようということにしたんですが、これも一種の中間支援組織的な運営をしたいと考えたからです。私はもっと中間支援組織としてのボランティア活動が展開されていけばいいと思っています。結構できてきました。宝塚NPOセンターや市民活動センター神戸など。この北播磨市民活動支援センターにも大いに期待しています。

